



Title	M・メルロ＝ポンティにおける現象学的記述について
Author(s)	池田, 清
Citation	カルテシアーナ. 1982, 4, p. 53-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66890
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

M・メルロー＝ポンティにおける現象学的記述について

池 田 清

序論

メルロー＝ポンティは、因果論的説明や反省的分析の構成した概念的存在としての科学的観念的世界を客観的世界 *monde objectif* と呼び、これを知覚世界の抽象的、記号的、従属的表現形態として価値づけ、この根拠を知覚世界の前意識的 *preconscient*、前对象的 *preobjectif*、前人称的 *prepersonnel* 等と形容される *pre-* の性格に見い出す。しかし客観的世界がそうした二次的な価値しかもたぬとしても、このことはその世界の否認を意味するわけではない。否認されるのは、知覚世界の主題化と称しながらもその *pour* の性格故にそれを利用するだけで、ひいては客観的世界の二次性をその可能性の条件としての「超越論的意識」という名称によって救おうとする因果論的説明態度——これは自己をその意識とすることでのその名称を口にしないのだが——や反省的分析態度である。逆に客観的世界の有効範囲つま

り両態度の所産としての言語の意味作用の射程を知覚世界の側から概念化し直すこと、これがメルロ＝ポンティの恒常的課題である。ところで客観的世界を概念的言語世界、知覚世界を言語によって客観化される以前の言語下の世界と解し両者を原理上区別することができるとしても、因果論的説明主体や反省的分析主体に見られるように知覚世界は客観的世界によつて事実上隠されがちであり、両者の境界は客観的世界による知覚世界の隠蔽によつて消失しがちである。しかもこの隠蔽が主体の意図に基づいてなされるのではなく彼の気づかぬうちになされるのである。客観的世界による知覚世界の暗黙の隠蔽故にメルロ＝ポンティはこの隠蔽をはがし、両世界の関係を問い直すそうと企てるわけである。そうだとすると客観的世界は知覚世界に対しては二次的でしかないとしても、それは、主体に対しては、客観化や顕在化の手段ではあつてもそれ自体は客観化も顕在化もされておらず、「文化的世界は我々の実存の糧である」と言われるように知覚世界同様に *pre-* の性格を帯びているのである。換言すれば客観的世界は言語的文化的世界は歴史的沈澱物として主体にすでに与えられているのであつて、ここから *pre-* の性格を帯び知覚世界を暗黙的に隠してしまうわけである。ところで客観的世界の *pre-* の性格はそうした隠蔽を意味するだけではない。概して *pre-* の性格は時間的先を意味し従つて反省的对象把握の遅延の契機となるわけだが、さらに「単に私の思惟の發生に關係するばかりかその意味も規定する〔沈澱した歴史〕全体」という言葉の示す通り、時間的後のものを暗黙的に規定するという意味合いをもっている。ここでメルロ＝ポンティの企てが大きな困難に直面していることが明白となる。つまり客観的世界の有効範囲を知覚世界の側から概念化し直すという企ては、言語的文化的世界として *pre-* の性格を帯びた客観的世界から気づかぬうちに規定されるのである。しかしメルロ＝ポンティは、客観的世界からのこの規定作用に対して無抵抗でいるわけではないのであつて、その世界の反省的一時停止としての現象学的還元に対して否定

的にはあるが「還元最大の教訓は完全な還元は不可能だということである」⁽³⁾とすること、可能な限りその規定作用に抵抗しそれを減じようとするのである。それ故メルロ＝ポンティは、結果の外的決定者としての原因の観念や現象の内具的構成法則としての理性の観念等を使用したゲシュタルト心理学者の理論構成の内に客観的世界の悪しき規定作用を見出し、それに対して無抵抗であつた彼等を「カテゴリーの更新 *renouvellement des catégories*」

「悟性の変革 *réforme de l'entendement*」の欠如という点で批判するわけである。ここにこそ「自己自身の端緒の更新される経験」⁽⁵⁾としての哲学、現象学的記述の特異性と同時にその問題性があるのであつて、歴史的沈澱物としての言語的文化的世界⇨客観的世界によつてその「コグニ」の性格故に規定された現象学的記述が同時に「カテゴリーの更新」でなければならぬとすれば、その記述の主体は自己の記述にいかにして言わば更新性をもたらし得るのか。「哲学もまた歴史の中にあるのだから世界と構成された理性を利用する。従つて哲学は全ての知識に差し向ける問いを自己自身に差し向けねばならないだろう」⁽⁶⁾とすること、メルロ＝ポンティは、「カテゴリーの更新」としての現象学的記述の更新性への問いを哲学の自己回帰的問いと捉え、その必要性を説くのである。現象学的記述の更新性はいかにして生じるのか、これが本論の問題である。⁽⁷⁾

ところでメルロ＝ポンティは自己の現象学的記述を実践するだけでその理論化に至っていないと言われるかもしれない。この問題は彼の言語論に対する視座の相違に因つてゐる。彼の言語論を哲学の一領域と捉えるなら、それは現象学的記述の所産となりその理論とは原理上次元を異にするわけだからその意見は承認されねばならない。確かに『知覚の現象学』において言語の問題は「主体と客体の古典的二分法」⁽⁸⁾を越える格好の現象として導入されている。しかしそこでも後に見るように語る言葉 *parole parlante* と語られた言葉 *parole parlée* が区別され前者が哲学者等

において可能とされると言われる時、また『見えるものと見えないもの』において哲学自身が語る言葉（＝作動する言語 language operant）であると言われる時、語る言葉を対象とする言語論は単なる哲学の一領域に留まらず哲学的記述の成立を問うているのであるから、先の意見には疑問がもたれる。すなわち「カテゴリーの更新」としての現象学的記述とは語る言葉に他ならぬのだから、メルロ＝ポンティが語る言葉を論じる限りそれは現象学的記述理論でもあるわけである。この視座に立つ時、表現と真理の研究を文学的言語の機能の明白化を通して始めると意図された『世界の散文』は未完ではあっても少なくともその理論に着手している。確かにその著作は文学的言語を論じ、より多く絵画表現を論じているが、これはメルロ＝ポンティの方法上の問題であり、つまり哲学者、作家、画家の三者に既得の意味を改変する作業という共通点が見い出され、そこから語る言葉を論じるにはその格好の例である文学的言語の方が哲学的カテゴリーによつて哲学的記述を論じるよりも論述対象として適当であり、また言語の既得性故に沈黙という形態をとる語る言葉を論じるには無言の表現形態をとる絵画表現が論述対象としてより適当であると考えられているのである。換言すればメルロ＝ポンティは『世界の散文』において絵画表現の地の上に文学的言語表現を論じこの言語表現の地の上に哲学的言語表現つまり現象学的記述を論じるのである。従つてこの小論はメルロ＝ポンティのこの方法上の手続きを踏まえた上で主に『知覚の現象学』と『世界の散文』に因つて先の問題に迫らうとするものである。

I 反省

客観的世界の有効範囲を知覚世界の側から概念化し直そうと目論む現象学的記述主体の方法態度も反省的分析主体

同様反省にあるが、メルロ＝ポンティはそこに二種の反省を区別し前者のそれを徹底的反省 *reflexion radicale* 後者のそれを「自己自身の端緒を自覚しない不完全な反省」⁽¹⁾と称する。反省的分析主体とはデカルト、カント等の主知主義者を意味するのだが、メルロ＝ポンティは彼等の純粋と自称する理論構成の出発点にある反省作用の内に、「現象学の主要な発見」⁽²⁾として顕在的認識以前にある「世界と我々の生の自然的前述定の統一をつくっている指向性、：作動的指向性」⁽³⁾という事実性を暴露する。すなわちメルロ＝ポンティによれば、反省における知覚世界とその顕在知の一致つまり非反省的なものと反省的なもの一致は反省主体の時間的展望性故に時間的地平の指向的推定的綜合に基づく指向的推定的一致 *coincidence intentionnelle et présomptive* でしかないのに、反省的分析主体は自己のこの展望性を忘れその綜合を時間的地平を指向的ではなく事実的に遍在する超越論的意識の現実的事實的綜合とみなしその一致を現実的一致 *coincidence réelle* と見誤るのであって、なぜなら彼等にしても反省の具体的行為の中で非反省的なものと反省的なものとの間の非連続性を実践的に統御しているのであり従って「作動的指向性」を利用しその一致を「事実によって証明している」⁽⁴⁾からであると捉えられる。逆に言えば反省的分析主体は反省の具体的行為の中で「作動的指向性」という事実性を利用しそこから非反省的なものと反省的なものとの一致を現実的一致と錯誤し、「超越論的意識」「即自」「対自」等と表現される「我々にとつて指向的ではないもの」⁽⁵⁾がどこかで実現されていると想定される⁽⁵⁾に至るわけである。ここからメルロ＝ポンティは、反省的分析主体は「事実上の権力：単に抵抗できないだけの明証性」⁽⁶⁾、「素朴な確実性の諸力」⁽⁷⁾を利用するだけで主題化するに至らないという意味で彼等の反省を先のように形容するのである。

ところで反省的分析主体は現実的一致という先の錯誤故に知覚世界、非反省的なものを顕在知、反省的なものに暗

黙の内に還元するという形で前者を抑圧し後者の素朴な明証性によって前者を廻行的に構築したのであるが、だからといって逆にメルロ＝ポンティは現象学的記述主体として指向的、推定的、一致故に後者を前者に還元することで後者を無意味たらしめようとするわけではない。仮に現象学的記述主体が非反省的なもの、知覚世界を直接対象化し得るとすれば彼は反省的なもの等をわざわざ介する必要はないであろうが、メルロ＝ポンティはそれらの直接的対象把握に基づいてそれらを概念化することを不可能とみなす。確かに現象学的記述主体が最初にもつているのはそこでは何も主題化されていない知覚世界、非反省的なものではあるが、しかし彼に最初に与えられているのはそうしたものである。非反省的なものへと開かれた反省、非反省的なものの反省的再把握⁹⁾であるとされる。「物と物についての意識は同時に決して存在するものではないのと同様に過去と過去についての意識も同時には決して存在するものではない¹⁰⁾」のであり、つまり現象学的記述主体は、知覚世界、非反省的なものに参与している時にはそれらに対して定立的に関係しているのではなく「—のもとに存在する être-a—」という「脱||存 ex-sistance」の存在様態である故にそれらを対象として把握し得ないのであって、そうしようとすればそれらから離れそれらを失う必要があるのであり反省によって歪曲せざるを得ないわけである。しかしそれらの直接的対象把握の不可能性は反省的なもの、顕在知を無意味たらしめる理由とはならぬとしても、結局意識とそれが捉えようとしているものを切り離すことでメルロ＝ポンティは懐疑主義へと陥るのではないか。従ってそれを避けようとするならば現象学的記述主体に最初に与えられているのが「非反省的なものの反省的再把握」であるのは何故か、知覚世界、非反省的なものと顕在知、反省的なものとの間に指向的推定的、一致が成立するのは何故かが論じられねばならない。メルロ＝ポンティは両者の関係を「基礎づけ『Fundierung』」の関係として捉える。「基礎づけるものとして働く項—：非反省的なもの…言語、知覚—は、基礎

づけられるものが基礎づけるものの一規定ないし一顕在形態として現われるという意味では、確かに最初のものであり、このことが基礎づけられるものによる基礎づけるものの吸収を不可能にしている所以であるが、しかし基礎づけるものは経験的な意味で最初のものだというわけではなく、基礎づけられるものを通じてこそ基礎づけるものが姿を現わす以上、基礎づけられるものは基礎づけるものの単なる派生物ではないわけである。メルロ＝ポンティはこの極めて形式的だが非常に重要な言葉において、「非反省的なものの反省的再把握」、指向的推定的、一致の根柢を経験的な意味で最初のものではない基礎づけるものが基礎づけられるものを通じて姿を現わす点に求めるのであるが、このことはいかなる事態を意味しているのか。「意識は時間と世界の包括的投企なりその視像であるが、それは自己に現われるために、自己が潜在的にあるところに顕在的になるために、つまり意識となるために、多様の中に自己を展開する必要があるのであるようなそうした投企なり視像でなければならぬ。我々は不可分力とその個別的な諸現出を別々のものと考えてはならない」、換言すれば知覚世界、非反省的なものの只中に位置する意識（＝「包括的投企なり視像」「不可分力」としての意識）が自己を顕在的とするために自己を展開しそこに顕在知、反省的なものとしての意識（＝「多様」「自己の個別的な諸現出」としての意識）が成立するのである。メルロ＝ポンティは前者の意識のこの自己展開性をハイデガールの用語で「自己による自己の触発」、フッサールの用語で「現象としての自己を自己自身へと構成する」と表現し、またこの自己展開の必然性を、「単に現実的なあるいは流れる時間であるだけでなく自己を知る時間でもあることが時間に本質的なのだ」と捉え、「流れる時間」としての知覚世界、非反省的なものの只中に位置する意識がまた顕在知等として「自己を知る時間」でもあることにつき「その全本質が光のそのように見せるということにある存在者」でもあることに見い出すのである。ところで「時間、世界の包括的投企なりその視像」として

の意識とは自然的自我 *moi naturel* としての身体に他ならず、「身体は認識機能を果しつつある自分自身を外部から不意に捉え、触れている自己に触れようとし、〈或る種の反省作用〉を素描する」と言われるように身体は自己を対象化しようとするのであるから、結局身体が自己の本質上自己の知覚世界等を顕在知等として展開するのであって、この意味で「私の身体の事実的存在は私の〈意識〉の存在にとって不可欠である」わけである。従って経験的な意味で最初のものではない基礎づけるものが基礎づけられるものを通じて姿を現わすとは、身体が自己の知覚世界等を顕在知として展開することつまり身体の自己展開を意味し、メルロ＝ポンティはこの自己展開の内に「反省的再把握」、「指向的推定的一致」の根拠を見い出すわけである。

ところで知覚世界、非反省的なのがこのような「反省的再把握」によってのみ現象学的記述主体に顕在知、反省的なものとして与えられるとすれば、両者間には隔たり *écart* が介在し後者の遅延 *hétérogénéité* が介在することとなるが、客観的世界（顕在知、反省的なもの）の有効範囲を知覚世界、非反省的なものの側から概念化し直すためにこの隔たり、遅延を自覚した上でそれらが起因する身体による知覚世界等の自己展開に対して可能な限り意識的であろうとする方法態度、これをメルロ＝ポンティは自己に課するのであって、それ故「哲学の中心は、反省の不断の端緒の中に、個人的生が自己自身について反省し始める一点に位置する」¹⁹、「根源的なものは炸裂する、そして哲学はこの炸裂、この不——一致、この分化に随伴せねばならない」と言われ、この方法態度が徹底的反省と呼ばれるのである。「徹底的反省とは単に作動的反省であるばかりでなくその作動のなかで自己自身を意識している反省である」²⁰のであって、それは、反省的分析主体のように「非反省的なものの反省的再把握」の所産として与えられる反省的なもの等に盲目的に追従するのではなく、この「反省的再把握」自体に自覚的に追従しようとする現象学的記述主体の方法態度であるわけ

ある。しかしこの徹底的反省とは上述の概念化のやり直しという現象学的記述主体の知的理論的指向が実現されるのに必要な方法態度にすぎず、この反省自体によって彼の指向が実現されるわけではない。彼の指向が実現されるのはこの反省によって使用される言語によってであって、しかも「カテゴリーの更新」として新しい意味を帯びている限りの言語によるのである。従って、徹底的反省に立つ現象学的記述主体はどのようにして身体による知覚世界、非反省的なものの自己展開に、彼に与えられているはずの「反省的再把握」に新しい意味を帯びた言語を介入させ得るのかが論じられねばならない。

II 語る言葉

メルロ＝ポンティは既得の言語体系を構成された言語 *langage constitué* と呼びそれを「確立された諸記号と自由にし得る諸意味の諸関係の全体 *masse des rapports de signes établis à significations disponibles*」と定義し、これへの表現主体の係わり方に注目して、語られた言葉 *parole parlée* と語る言葉 *parole parlante* を区別する。語られた言葉とは表現主体の内面的生に他ならない内面的言語として「すでに構成されすでに表現されてしまっている諸思惟 *pensées déjà constituées et déjà exprimées*」の外部への顕現という意味で「言葉についての言葉 *parole sur les paroles*」であり、また文化的獲得物としての構成された言語を表現主体がそのまま受継ぐという意味で「自由にし得る諸意味を既得の財産のように享受する」⁽¹⁾ 言葉であって、換言すればそれは文化的獲得物としての構成された言語を享受した「すでに構成されすでに表現されてしまっている諸思惟」の外的顕現である。この意味で語ら

れた言葉は現象学的記述主体の企てにとつて廃棄さるべきものである。つまり語られた言葉は思惟を前提とするが、それがすでに構成され表現されたものである限りにおいてそれは反省の所産としての反省的なものであり、従つて語られた言葉は反省的なものを前提としているわけであるからその言葉は因果論的説明主体や反省的分析主体の理論構成自体を成すものである。現象学的記述主体は語られた言葉の前提となる反省的なもの \parallel 構成され表現されてしまつてゐる諸思惟の射程を確定するためにそれを出生状態で捉えようとするのである。では語る言葉とは何か。それは、構成された諸思惟を前提とする語られた言葉との対比でそうした思惟を内的に前提としないという意味で、思惟と同一視できる言葉であり、その成立は思惟と表現の同時的な成立であると捉えられる。従つて語る言葉 \parallel 思惟という事態を詳細に検討せねばならない。

まずメルロ \parallel ポンティは語る言葉をレクチュールの次元で次のように定義する。「それ（語る言葉と同義）は、すでに自由にし得るものとなつてゐる諸記号と諸意味の或る種の配置が変化し、次にその各々を変様し、ついには新しい意味を分泌し読者の精神の中に以後自由にし得る道具としてスタンダール（ \parallel 記述主体）の言語を確立するようにする作用である」、つまり語る言葉とは既得の言語体系に対する変様作用を通して新しい意味を讀者に指示する作用であり、またその意味を再び既得のものとして以前の言語体系に加える作用であると定義される。ではこの定義の前半部の語る言葉の既得の言語体系に対する変様作用とは何を意味しているのか。ここでメルロ \parallel ポンティはソシユールを引用し諸語を「対立的相対的否定的諸存在 *entities, oppositives, relatives, et négatives*」と定義し、諸語が他の諸語との示差的关系においてのみ意味的となる点に注目する。ソシユールは言語体系は音韻示差と概念示差のみを含むと捉えたが、文学的文学的言語を論述対象とするメルロ \parallel ポンティは特に概念示差を重視し、既得の日常的諸意味の

ある。ところで現象学的記述を問題とする限りエクリチュールの次元で語る言葉を論ずべきだったが、言語表現の中心に自己意識を伴った思惟主体を想定しないことから語ることに、書くことと聴くこと、読むことの区別は反省作用の結果にすぎぬとするメルロ＝ポンティにおいては、先の語る言葉についての定義もその成立様態もこの次元に妥当するのである。この次元では、諸語の日常的諸意味の変様作用 \parallel 示差化という語る言葉は諸語の「自己の定義や通常認められており自己の内に沈澱している自己の意味を越える指示力」として、また語る言葉の「いつのまにか」という成立様態は「命令、私が自己自身に自分で与えようとする命令さえも受けつけぬ自発性」として、「今獲得された意味が新しい意味であった」として表現されるのである。両次元を要約すれば語る言葉とは自己の日常的諸意味の変様作用 \parallel 示差化によってそれらを越え新しい意味を指示する諸語の自発的指示力と表現されよう。では語る言葉の成立様態を表現している「いつのまにか」「自発性」とはいかなる事態を意味しているのか。この変様作用 \parallel 示差化、裁ち直し、指示力の内にデカルト的な超越論的思惟主体を想定するなら、この主体は超越論的である限りで記述主体の背後に位置するのであるから、この主体の働きに対する記述主体の無力さの自覚が「いつのまにか」等と表現されることとなる。もし超越論的思惟主体が、記述主体にとつて新しいと思われる意味をすでに超越論的思惟として定立的に確立しており、これを諸語の日常的諸意味の示差化によって記述主体に経験的に顕現するところに語る言葉が成立するとすれば、それは諸語を必要としない定立的思惟を想定することになるが、メルロ＝ポンティは、「思惟の作用はいったん表現されることによつてはじめてそれ以後生きのびる力をもつ」と言い、思惟が定立的に存在するには諸語によつて表現されることが不可欠であると捉えることで、諸語を必要としない超越的な定立的思惟の存在を、またその思惟の構成者としての超越論的思惟主体の存在を否定するのである。そうではなくて逆に「いつのまにか」「自発

性」とは定立的思惟作用の沈黙、意識の沈黙 *silence de la conscience* を想定しているのである。すなわち語る言葉が成立するのは、知覚世界、自己、諸語に対して定立的意識をもたない限りで「人格喪失の芽をもつ（自我）」¹⁰のその人格喪失の部分においてである。つまり「身体こそが示し身体こそが語る」と言われるように、諸語の分節的音節的本質を自己の可能な使用法のひとつとして所有している身体、「その術策のすべてが諸記号を示差化し組織化することこの言語下の生」¹¹としての身体において語る言葉が成立するのである。それ故、「我々が非常に意図的に求めるものは我々に獲得されない」¹²と言われるように、身体による語る言葉の成立に対する記述主体の定立的態度の無力さの自覚が「いつのまにか」「自発性」と表現されるのである。しかし語る言葉の成立がこのようなものであるとしても、このことは語る言葉が記述主体の意図と無関係に生じることを、記述主体が意味指向 *intention de signifier* を欠いていることを意味するわけではない。「諸語は私が言おうとすること *ce que je veux dire* によって私から引き離される」と言われる通り、記述主体は表現さるべき指向対象をもっているであって、この意味指向が「自己を表現してくれる諸語の意味を原理上乗り越え改変し結局は自分自身でそれを固定する」¹³のである。ただ注意せねばならぬのはこの意味指向は記述主体において定立的言語の様態で存在しているわけではないということであって、それというのも、意味指向がそうした様態で存しているとすれば、それはすでに構成され実現されているだからこの指向に基づく言葉とはられた言葉となるであろうから。そうではなくて意味指向は記述主体に暗黙的 *implicite*、非—定立的 *non-thématique* な様態で、つまり「充足されるのを求めているひとつの欠如態」¹⁴という様態で存しているのであり、それ故この指向の実現としての語る言葉は「読者に—そして作者にさえも—彼が考えも言いもし得なかつたことを教える」¹⁵ことができるわけである。

以上のことから語る言葉⇖思惟という事態が明確になる。それは、語る言葉が顕在的定立的に構成された思惟を前提とせず暗黙的、非―定立的な意味指向に基づいて身体による諸語の日常的諸意味の変様作用⇖示差化を通して新しい意味、新しい思惟を実現するという事態を意味しているのであり、語る言葉の成立を表現する諸語の自発的指示力に「いったん表現されることによってそれ以後生きのびてゆく力をもつ」と言われる思惟の作用は依存するという事態を意味しているのである。メルロ⇖ポンティは語る言葉と思惟のこの関係を端的に先の「基礎づけ」の関係として捉える。すでに見たようにこの関係の要点は経験的な意味で最初のものではない基礎づけるものが身体によって基礎づけられるものとして展開させられる点に依存しているわけだが、言語と思惟のこの関係において言語が思惟として展開されるとは語る言葉の成立を表現する諸語の自発的指示力によって、同じことだが身体による既得の言語体系の変様作用⇖示差化によって新しい思惟が成立することを意味し、基礎づけるものとしての言語が経験的な意味で最初のものでないのもその言語がまさに身体のそうした活動としての語る言葉として新しい意味、新しい思惟を実現するからに他ならないからである。

Ⅲ スタイル

前節では語る言葉⇖思惟という事態を語る言葉の成立過程を既得の言語体系との関係で考察したのであるが、この事態は、思惟が語る言葉に、諸語の自発的指示力に依存することを意味するに留まらず、語る言葉の実現する意味指向が記述主体に充足さるべき欠如態として暗黙的、非―定立的様態で存していることを意味する。彼の意味指向がそう

した様態であるのはその指向対象が外的モデル *modele exterieur* という範をもたないからである。メルロ＝ポンティは記述主体の指向対象を「私の身体が全的にくみしている世界の論理」⁽¹⁾ 従って彼と世界の根源的關係としての「世界の暗示的論理」⁽²⁾ とする。指向対象、「私の言おうとすること」⁽³⁾ がそうした *pre-* の性格を帯びたものである故に彼の意味指向が暗黙的、非—定立的であるわけである。では「世界の暗示的論理」を指向対象とする意味指向は記述主体の人格喪失の部分でつまり彼の身体によっていかにして諸語として実現されるのか、つまり記述主体は「世界の暗示的論理」をいかにして諸語として顕在的に顕現させるのか。

メルロ＝ポンティはこの顕在化の働きをスタイル *style* の働きとして論じる。スタイルとは何か。「スタイルとはすべての意味を可能とするものである。諸記号や諸徴表が各人や芸術家自身の中でそこにある諸意味の単なる指標となるだろう瞬間以前に、それらが経験に形態を与えた豊かな瞬間、作動的あるいは潜在的でしかなかった意味が自己を解放し自己を芸術家にとって自由に取り扱い得るものとして他者に近づき得るものとする諸徴表を見い出す豊かな瞬間がなければならない」⁽³⁾、「スタイルとは：画家が自己の知覚の中にまだ散在している意味を集中化しはつきりと存在させる（首尾一貫した変形）の一般的かつ具体的な指標である」⁽⁴⁾、すなわちスタイルとは、知覚の中に散在する作動的潜在的意味をはつきりと存在さすために諸記号をそれに見い出させる働きであり、作動的潜在的意味の諸記号への「首尾一貫した変形」の別名なのであって、換言すれば知覚世界を諸記号へと顕在的に変形する記述主体の働きである。では記述主体、スタイル、知覚世界の間はいかなるものか。スタイルは知覚世界を諸記号へと顕在的に変形する記述主体の手段である、つまり記述主体はスタイルによって知覚世界を諸記号へと顕在的に変形すると言えるか。しかしこの表現は、知覚世界が外的モデルとして確立しており、スタイルが確立された表現手段として

記述主体の自由にし得る道具となつてゐること、また顕在的な変形を外的モデルの顕在的な再現 representation と同一視することを意味する。そうではなくてスタイル \parallel 表現手段、知覚世界 \parallel 外的モデル、変形 \parallel 再現、この図式をメルロ \parallel ポンティは徹底して退ける。まず記述主体とスタイルの関係について「画家がすでに絵を描き始め何らかの点で自己自身の主人となつてゐる限りでは、彼のスタイルとともに彼に与えられてゐるもの、それは、彼がその総目録を作り得るような一定数の観念や癖ではなく、彼の輪郭や日々の彼の所作と同じように他者にはそれとして知られ得るが彼にはあまり可視的ではない定式化の様式なのである」と言われる。⁽⁵⁾ すなわち活動中の記述主体は、つまり知覚世界を諸記号へと顕在的に定式化しつつある記述主体はそうしてゐる限りその「定式化の様式」をつまりスタイルをそれとして認知し得ず、彼にとつてスタイルはまだ何もものでもなく、彼が活動を停止し懐古趣味に陥らぬ限り「スタイルが自己を対象として捉えることはできない」⁽⁶⁾ のであり、スタイルは記述主体にとつて自由にし得る道具としての表現手段たり得ないわけである。また知覚世界と記述主体の関係について「スタイルが作動してゐる時には画家は人間と世界、意味と不条理というような対照については何も知らないものであり、それというのも人間や意味が世界の上のまさにスタイルの作動によつて素描されるからである」⁽⁷⁾ と言われる。すなわち記述主体は知覚世界が諸記号として顕在的に認識されるのにスタイルの働きを必要とするのであるから、スタイルが作動中の時には彼はどんな顕在的認識ももつてはいないのであり、知覚世界は彼にとつてすでにできあがつて存在するような外的モデルではないわけである。このようにスタイル \parallel 表現手段、知覚世界 \parallel 外的モデルだとすればすでに作られてゐる外的モデルの写しとしての再現をまだ作られてゐない知覚世界の諸記号への変形と同一視することはできないのであつて、先の三つの図式は作動中のスタイルに身を置かない遡及的定式でしかないわけである。ところで先のスタイルの定義から推察

されるように、スタイルは知覚世界を諸記号へと顕在的定立的に変形するといってもこのことはスタイルが知覚世界を外的に捉えて諸記号をそれに割り当てる働きであることを意味するわけではない。スタイルと知覚世界の関係について「知覚がすでにスタイル化するのであり、つまり知覚は或る身体や或る行為のすべての諸要素に私が私の奥にしまこんでいる或る馴れ親しんだ規範による或る共通の遍差によって影響を与えるのだ。」⁽⁸⁾「知覚された光景の各ベクトルが、その光景の瞬間的局面を越えて、その光景のおよそ可能な変化の中に或る種の諸等価物の原理（＝スタイル）を確立し、諸対象の顕在化のスタイルと諸対象に対する我々の諸運動のスタイルを自己の分け前として創始するのだ」と表現される。すなわち知覚が自己の世界に散在する作動的潜在的意味をそのベクトルに従ってスタイル化するのであり、逆に言えばスタイルが知覚世界の作動的潜在的意味をそのベクトルに従って諸記号へと顕在的に変形するわけである。それ故言語表現は「知覚の中に開始されている世界の形態化を捉え直し越える」⁽⁹⁾のであるが、この「捉え直し越える」働き、つまりスタイルの働きは記述主体の思惟の内に、内的研究室 *laboratoire intime* の内に、従って知覚世界の外部に存するのではなくその世界の内に存するのであって、記述主体は「それによって世界を顕現させる諸等価物の原理（＝スタイル）がすでに世界の中に埋没しているかのように彼の世界を参照する」⁽¹⁰⁾わけである。

では知覚においてスタイル化⇨変形する主体が定立的思惟主体としての記述主体でないとするればそれは誰か。推察されるようにそれは「人格喪失の芽をもつ（自我）」としての記述主体の人格喪失部分である身体に他ならない。「：我々の身体のすべての活動はすでに一次的表現であり：それは、まず諸記号を諸記号として構成しそれらに表現されるものを住まわせる働きであり、何らかの先在する規約の条件下にはなく諸記号の配置そのものと諸記号の布置の雄弁さによって意味をもっていなかったものに意味を注ぎ込む働きであり、従って：領野を開き秩序を創始し制度や伝

統を設立する働きである」、すなわち身体は、作動的潜在的意味しかもっていないかった知覚世界、従って顕在的「意味をもっていなかったもの」としての知覚世界を「諸記号の配置そのものと諸記号の布置の雄弁さ」としてスタイル化するものであり顕在的「意味を注ぎ込む」のであって、そうすることで諸記号からなる「領野」等を設立するのである。この観点から再び知覚世界と諸記号の関係を問題とするならこの関係が先の「基礎づけ」の関係であることが理解され、またこの関係が依存する身体の自己展開の仕方が理解される。身体が自己の知覚世界を顕在知として展開すること、このことは、身体がスタイル化の主体として知覚世界の作動的潜在的意味をそのベクトルに従って「諸記号の配置そのものと諸記号の布置の雄弁さ」として顕在的に変形することであり、つまり展開 \parallel 変形 \parallel スタイル化であるのであって、こうした意味で「身体は自己の内にもその図式を携えている世界に身を捧げているだけではない。身体は世界によって所有されているというよりもむしろ身体は世界を離れて所有するのである。ましてや自己が目指すものを素描し外部に出現させる任を自己自身もっている表現行為は世界の真の回復を完遂するのであり世界を認識するために世界を作り直すのだ。」¹¹³と言われるのである。身体スタイル化の意味はこれに尽きない。身体が実現する「諸記号の配置そのものと諸記号の布置の雄弁さ」から理解されるようにスタイル化 \parallel 語る言葉である。すでに見たように語る言葉は既得の言語体系との関係では自己の日常的諸意味の変様作用 \parallel 示差化によってそれらを越え新しい意味を指示する諸語の自発的指示力、同じことだが身体による既得の言語体系の示差化に基づく新しい意味の呈示と規定されたのであるが、メルロ \parallel ポンティは語る言葉を「諸物についての我々の展望を与えてくれ諸物のなかにひとつの浮彫りをしつらえてくれる言語」として、また「うまく組織化された或る種の諸物 \mid 黒と白（ \parallel インクと紙）、声の音、手の運動（ \parallel エクチュール）を利用して、感覚的世界の地平に散在する諸意味を浮彫りにし分化し征服し蓄積する我々の

もつ能力¹⁰⁵」として捉え直す。このように語る言葉が知覚世界の作動的潜在的意味との関係において、つまり記述主体の意味指向の対象としての「世界の暗示的論理」との関係において規定し直される時、語る言葉はスタイル化と同義なわけである。

Ⅳ 沈澱作用―結びにかえて

Ⅱ節では既得の言語体系の日常的諸意味↓諸語の自発的指示力つまり身体による示差化Ⅱ語る言葉↓新しい意味を見、Ⅲ節では知覚世界の作動的潜在的意味↓そのベクトルによる変形つまり身体によるスタイル化Ⅱ語る言葉↓「諸記号の配置そのものと諸記号の布置の雄弁さ」Ⅱ知覚世界の顕在的定立的回復を見たが、こうした語る言葉による言語作品の意味は、既得の言語体系の日常的諸意味や知覚世界の作動的潜在的意味の再現ではないにしても、過去の言語作品の意味の再現である可能性は残っている。語る言葉Ⅱ示差化Ⅱスタイル化によって実現された言語作品の意味が過去のその意味に対して新しいと言いうるとすればその新しさの意味とは何かが論じられねばならない。

メルロ＝ポンティは、既得の言語体系を変様作用Ⅱ示差化の形でまた知覚世界をスタイル化の形で捉え直し越える働きである記述主体の活動を、同時に過去の言語作品を捉え直し越える働きとして、つまり過去の言語作品の予料 anticipation に対する応答 response として捉え直し、この予料―応答の系を生の歴史性 *historicité de vie* と呼び「画家（記述主体）が自己の場所と自己の時代を離れることなしに：世界の中でかつて描かれたすべてのものに一挙に彼を接合する歴史性¹¹¹」と規定する。そしてメルロ＝ポンティはこの生の歴史性を、記述主体を自己の単なる道具とする

ような歴史の中にある理性 *Raison* としての世界精神 *Esprit du Monde* と捉えるのではなく、「(自然的なもの)の様相 *mode du (naturel)*」で捉える。つまりメルロ＝ポンティによれば、異なる時代文化に属する言語作品間の意味の類似 *ressemblance* の問題は時代文化の多様性からすれば「何の規範も何のモデルもたぬ架空の蓋然性」²⁾で十分なのであり、また時代文化相互間の影響が可能なのは何故かという問題にしても「そうしたことが問題となるのは我々が地理学的あるいは物理学的世界の中に身を置き、そこに諸作品を同数のバラバラの諸出来事として位置づけることから始めた場合だけであり」³⁾、この時には再びこの言語作品間の意味関係を捉えるのに説明原理として世界精神を措定し、これによって意味関係の統一性を保証するに至るとされる。そうではなくて逆にメルロ＝ポンティは生の歴史性を、「人間の所作の固有性は自己の単なる事実存在を越えて意味することであり、意味を創始することである」⁴⁾と行うことで、言語表現所作間の意味の次元 *ordre du sens* として、その間の共犯関係 *complice* として見出すのである。換言すれば生の歴史性は世界精神の様相であるのではなく、言語表現所作の主体としての身体のあり方で *à la façon du corps*、その身体の側に *du côté du corps*、つまり「自然的なもの」の様相であるわけである。ではこの生の歴史性で結合された言語表現所作とその言語作品はいかなる関係にあるか。メルロ＝ポンティは、すべてのその所作は互いに共犯関係をもつばかりか、それが言語作品という形で保存され伝承されるなら、「企ての状況(＝生の歴史性)を変換し、そして後に来るであろう諸契機が自己とまさに別のものであることを要請する」⁵⁾とし、それ故言語表現所作は一連の言語作品という継起的歩みを素描すると捉える。この点においてメルロ＝ポンティはこれまで彼の影にあったヘーゲルを表面に出し、「自己展開すること、つまり変化すると同時に、ヘーゲルの言うように(自己自身に還帰すること、従って歴史という形態で自己を顕現することは芸術に本質的なことである」⁶⁾と行う。つまり生の歴史性で結合された

言語表現所作はその生の歴史性によって過去の言語作品の意味を応答という形で捉え直すと同時に自己を言語作品の内に保存することで将来の言語表現所作と新しい生の歴史性の内に入り、再びその所作によってとりあげ直されるという形で、言語表現所作は自己を展開していくわけである。ここからこの生の歴史性に基づいて実現された過去の言語作品の意味と現在のその意味の関係が理解される。メルロ＝ポンティはこの関係を生の歴史性としての予料―応答の系に基づいて「言葉は過去をその精神と意味において保存しようとする」と捉え直し、この保存の様態を沈澱作用 *sedimentation* と呼び「沈澱作用は単に創造物の上に創造物を積み重ねるのではなく統合するのである」と言う。つまり現在の言語表現所作は過去の言語作品の意味を自己の実現する言語作品という「構成中の全体 *totalité en constitution*」の諸部分としてその意味の内に統合する、つまり沈澱させるわけである。メルロ＝ポンティはこの事態を現在の言語作品の意味は少なくとも「可能的なものの資格で *à titre de possible*」過去の言語作品の中に含まれているものとして与えられると捉え、この「可能的なもの資格で」を重視する。つまり現在の言語作品の意味は現実的形で過去のそれらに内在していたのではないのであって、このように見えることは回顧的錯覚 *illusion retrospective* にすぎぬわけである。換言すれば現在の言語作品の意味は、過去のそれらの意味を、自己自身が将来生の歴史性の内に置かれる故に「構成中の全体」の諸部分として統合する、つまり沈澱させるわけである。

以上の観点からすれば、現在の言語作品は、既得の言語体系の変様作用 \parallel 示差化、また知覚世界のスタイル化としての語る言葉によって未来へと自己の意味を投げかけ新しい生の歴史性の内に置かれていると同時に、過去の言語作品の再構造化 *reconstruction* としての沈澱作用によって過去のそれらの意味を保持しているわけであり、従って現在の言語作品の意味はまさに時間の両義性の内において生成する意味 *sens en genèse* であるわけである。

ここで記述主体の意味指向の所在が理解される。それは記述主体の身体の相関者としての知覚世界の内にある。つまり「話したり書いたりする場合、我々は、我々の以前にありすべての言葉とは区別される何らかの言われるべきものに照準を合わせるわけではなく、我々の言うべきものとは、我々がそれを生きているところのものこれまでですでに言われたことに対する超過分すぎない」、すなわち彼に与えられているのが「世界の暗示的論理」自体ではなく、身体に基礎を置くその反省的再把握である故に、記述主体は「世界の暗示的論理」の完全な顕在的定立的概念化に失敗するのであって、「世界の暗示的論理」はまさに過去においてそれについて言われたことに対する生きられるもの、超過分として、既得の言語体系の日常的諸意味、過去の言語作品の意味に対する知覚世界の作動的潜在的意味として出現し、記述主体に意味指向を引き起こすのである。ここにこそ知覚的自然的態度が現象学へと自己を捉え直し越える——ここに身体の自己展開を見るのは容易だろう——というメルロ＝ポンティの基本的態度が看取されよう。

注
序論

- (1) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris 1945 (以下P.P.と略記) P.32
P.P. p.453
- (2) *ibid.* Avant-propos. — 傍点は著者が付け加えたものである。
- (3) *ibid.* p.60
- (4) *ibid.* Avant-propos. IX
- (5) *ibid.* Avant-propos. XVI
- (6) E・フィンクはこのことを主題化していない点においてフッサールを批判している。フィンクによれば、フッサールは自然的態度という日常的世界了解の中で通用している諸概念と現象学的記述の内実をなす諸概念の区別を現象学的還元理論の中で主題化しようとしたものの、この区別は曖昧なまま残されており、自然的態度の内の諸概念がいかにして現象学的記述の中に適用されるかという超越論的概念の可能性は解明されていないとされる。(新田義弘、小川侃共編『現象学の根本問題』(フッサールの現象学における操作的概念) フィンクのこの指摘はメルロ＝ポンティによるフッサールに占める還元の度重なる問題化という指摘と相反しているが、ともかく自然的態度↓現象学的記述の発見がフッサールの後期思想に特徴的立場であることを考えれば、やはり自然的態度に基づく現象学的記述の問題がフッサールにおいて残された問題であることに相異なるであろう。
- (7) P.P. p.203
- (8) *ibid.* p.208
- (9) *ibid.* p.208

- (10) M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Paris 1964 (『V. I. 手記』) p. 168
- I 区
- (1) P. P. Avant-propos IV
- (2) P. P. Avant-propos
- (3) *ibid.* Avant-propos
- (4) *ibid.* p. 53
- (5) *ibid.* p. 50
- (6) *ibid.* p. 51
- (7) *ibid.* p. 50
- (8) *ibid.* p. 279
- (9) *ibid.* p. 413
- (10) V. I. p. 163
- (11) P. P. p. 451
- (12) *ibid.* p. 485
- (13) *ibid.* p. 487
- (14) *ibid.* p. 487
- (15) *ibid.* p. 487
- (16) *ibid.* p. 487
- (17) P. P. p. 109

- (18) *ibid.* p. 493
- (19) *ibid.* p. p. 75~76
- (20) V. I. p. 165
- (21) P. P. p. 253
- II 語の加搦
- (1) P. P. p. 229
- (2) M. Merleau-Ponty, *La prose du monde*, Paris 1969 (改訂P. M. 全巻記) p. 20
- (3) P. M. p. 62
- (4) *ibid.* p. 20
- (5) *ibid.* p. 28
- (6) *ibid.* p. 123
- (7) *ibid.* p. 122
- (8) P. P. p. 226
- (9) *ibid.* p. 449
- (10) P. M. p. 29
- (11) P. P. p. 231
- (12) P. M. p. 161
- (13) *ibid.* p. 159
- (14) *ibid.* p. 122

- (15) P. P. p. 445～446
(16) *ibid.* p. 214
(17) P. M. p. 22
III
スタイル
(1) P. P. p. 377
(2) P. M. p. 91
(3) *ibid.* p. p. 81～82
(4) *ibid.* p. 86
(5) *ibid.* p. 82
(6) *ibid.* p. 83
(7) *ibid.* p. 83
(8) P. M. p. 84
(9) *ibid.* p. p. 174～175
(10) *ibid.* p. 86
(11) *ibid.* p. 86
(12) *ibid.* p. p. 110～111
(13) *ibid.* p. 110
(14) *ibid.* p. 126
(15) *ibid.* p. 199

IV 沈澱作用—結びにかえて

- (1) P. M. p. 103
 (2) *ibid.* p. 111
 (3) *ibid.* p. 112
 (4) *ibid.* p. 112
 (5) P. M. p. 116
 (6) *ibid.* p. 116
 (7) *ibid.* p. 141
 (8) *ibid.* p. 142
 (9) *ibid.* p. p. 158～159

尚引用文中の()は著者が付け加えたものである。

(博士課程学生)